

博士論文審査の結果の要旨および担当者

学位申請者 橋本 佳奈

論文担当者

主査 山本 悟史



副査 長野 基子



副査 高良 恒史



博士論文名

薬学生を対象とした一次救命処置講習受講前後の意識変容に関連する因子の探索に関する研究
A Study to Explore Factors Associated with Basic Life Support Training for Pharmacy Students and Changes in Awareness Before and After the Course

【論文審査の結果の要旨】

本学位申請者は、第4学年次薬学部生を対象にした Basic Life Support (BLS) 教育において、PUSH コース受講前後にアンケート調査を実施し、意識変容と満足度に着目して検討している。BLS 実施の現状と救命率、BLS 教育の実施状況と問題点等の研究背景について国内外における文献検討を適切に行っている。検討項目として、①コース受講前後において BLS に対する自信、覚悟、不安および指導意欲に関する意識変容とこれに関連する因子の探索、②受講生の層別化、③受講満足度の調査、を実施している。研究目的は明確で、研究課題として適切である。

アンケートは、Google フォームを用いた web 回答形式とし、①は受講前後に 21 質問、③は受講後に 9 質問を実施している。参加は個人の自由意志であることを説明したうえで、ランダム ID を発行して受講前後の紐づけを行うとともに、個人を特定できないように配慮をしている。回答を単純集計したうえで、①は Fisher の正確確率検定による回答分布検定、ならびに因子分析を実施している。さらに因子分析の結果を基に②は階層型クラスター分析を実施している。本研究は、研究方法、実験方法・データ収集方法、データ解析方法は適切である。また、兵庫医療大学倫理審査委員会の承認ならびに兵庫医科大学学長の許可を得て実施しており、倫理事項を遵守している。

実験結果は、①において自信、覚悟、指導意欲の向上および不安の軽減が認められ、薬学部生を対象とした BLS 教育として適切であることを示唆している。②ではプレ回答で 3 群、ポスト回答で 3 群に分類することができ、受講前後の群を比較検討した結果、自信の芽生えや他者との共同といった意識変容が生じたことを明らかにしている。一方、受講による教育効果が乏しい群の存在を示唆している。③では天井効果が認められるものの受講満足度は高いことが示されている。

本研究は、PUSH コースが薬学部生に対する BLS 教育に有用であることと教育効果の乏しい群が存在することを科学的に証明した意義ある成果であるといえる。適切な文献を用いて妥当な考察を行っており、全体を通して一貫性・論理性があり、形式も整っている。兵庫医科大学大学院薬学研究所の論文審査基準をすべて満たしており、本論文は博士論文にふさわしいものであると判断する。

最終試験の結果の要旨および担当者

学位申請者 橋本 佳奈

論文担当者 主査 山本 悟史



副査 長野 基子



副査 高良 恒史



博士論文名 薬学生を対象とした一次救命処置講習受講前後の意識変容に関連する因子の探索に関する研究
A Study to Explore Factors Associated with Basic Life Support Training for Pharmacy Students and Changes in Awareness Before and After the Course

【最終試験の結果の要旨】

博士論文の内容に基づいた質疑応答を通じて、本学位申請者が本研究科のディプロマポリシーを満たしているかどうかを審査した。

DP1: BLS について、また BLS における PUSH コースの位置づけ、他のコースとの違い等について必要かつ十分な説明があった。PUSH コースは人工呼吸を行わない講習であるが、心臓マッサージのみでも救命率に関しては遜色なく、PUSH コース講習の有用性についての説明があった。このことから、自立した薬学研究者として活動するために必要な専門的知識を有していることが確認できた。

DP2: BLS 教育に関する先行研究と今後必要な研究について、日本においては、満足度の向上、フィードバック効果等についての先行研究があること、また海外における研究について説明があった。今後は、意識変容の維持、さらに行動変容、技能変容等について研究する必要がある旨の説明があった。このことから、自分の研究課題に関連する他者の研究を理解し、批判的に吟味した上で、自分の研究の発展に役立てることが出来る能力を有していることが確認できた。

DP3: 薬学部における BLS 教育の現状と教育効果が上がる方法について尋ねたところ、BLS 教育は薬学教育モデル・コア・カリキュラムにも記載されており、全ての薬学部で実施されているものの1度きりの場合が多く、医療現場に出て行くことを考慮すると不十分である。BLS 教育の回数を増やす必要やピア評価を導入することにより効果的な教育ができる可能性の説明があった。これらのことより、医療の抱えている重要な問題点を自ら見出し、それに基づき十分に検証可能な薬学的課題を設定する能力を有していることが確認出来た。

DP4: BLS 教育を効果的にする方法について、自分独りだけの力では難しいが、他の教員からの協力を得ながら本学に導入したい旨の説明があった。このことより、薬学的課題を解決するために必要な技能と強い意欲を有し、これからも薬学の発展に貢献することが期待できると確認できた。

DP5: 博士論文が作成されており、研究成果を論文として発表することができることを確認した。

以上より、本学位申請者は、兵庫医科大学大学院薬学研究科のディプロマポリシーを達成しており、最終試験の合格レベルに達していると判断する。